

刈羽村 あかだましがた 赤田町方の地蔵井戸

主要地方道 鯨波・宮川線を刈羽村方面に進む。飯塚を抜け柏崎市の境界を越えると、そこが刈羽村赤田町方地区である。赤田城址を擁し古い歴史を誇る赤田町方は、古くから草生水（原油）が採油されていた。油が湧き出て田が赤くなったことが「赤田」という地名の由来といわれる。（「角川日本地名大辞典」） その赤田町方地内、民家の庭先に、地蔵井戸は存在する。

この地蔵井戸は、天保年間（1830～1844）以前に掘削されたものと伝えられており、名前にまつわる次のような伝説が残っている。

飲料水を確保するため、近隣の人々が共同で井戸を掘ることとなった。1メートルほど掘り進むと、鍬の先に石のようなものが当たった。よく見ると、大きさ40センチほどの地蔵尊が3つ並んで埋まっていた。これはご利益があるにちがいないと、地蔵尊は近くに祀られることとなった。井戸は固い岩盤に阻まれ、なかなか掘り進むことができなかったが、4メートルほど掘り下げたところでようやく帯水層にたどり着いた。良質の水が大量に湧き出したことから、これは地蔵様のお恵みに違いないと人々は大いに喜び、祝杯を挙げて成功を祝った。そして、井戸を掘っているときに地蔵尊が出てきたことから、この井戸は地蔵井戸と呼ばれるようになった。

地蔵井戸は、昭和46年に水道の給水が始まると飲料水としてはほとんど利用されなくなったが、それまでは近隣の人々の生活を支える重要な役割を担っていた。井戸から



地蔵井戸 後方上ったところ（竹林の奥）に地蔵堂がある

家まで送水管を設置し、利用の便を図る世帯もあった。また、かつては井戸を利用する人々により掃除が毎年行われていた。地域の墓掃除の日である8月7日の午後1時より行われるのが慣例であったという。

井戸を掘った時に発見されたという地蔵尊は、現在も井戸後方の地蔵堂に昔のままの姿で祀られている。その容貌については「赤田町方郷土史」のなかで次のように語られている。「その御面貌の異様な事は到底通常の地蔵尊のイメージとは程遠く、細目で慈眼豊頬ではあらせられず、眼丸くして大きく在らせられて、お詣りする度に不思議の思いがするのである。」地蔵尊は眼病に靈験あらたかといわれ、多くの人がお参り・お礼参りに訪れていたという。往時には参詣者により多くの提灯やのぼりがかけられていたとのことである。



参考文献

- 「赤田町方郷土史」赤田町方枯木老人クラブ郷土史研究会編（224 7カ）
- 「赤田町方物語」相沢興一郎編（224 7イ）
- 「刈羽村の民俗」刈羽村教育委員会編（382 加）
- 「刈羽村物語」刈羽村物語編さん委員会編（224 加）